



Title	西鶴浮世草子における教訓性の考察
Author(s)	浜田, 泰彦
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57850
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

		【18】	
氏 名	はま	た	やす ひこ
	浜	田	泰彦
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）		
学 位 記 番 号	第 23472 号		
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 3 月 23 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻		
学 位 論 文 名	西鶴浮世草子における教訓性の考察		
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 飯倉 洋一 (副査) 教 授 荒木 浩 講 師 合山林太郎		

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、3章構成であり、西鶴の『武家義理物語』『日本永代蔵』『本朝二十不孝』の3作品を通して、西鶴浮世草子における教訓性について考察したものである。

序論では、西鶴作品における当代把握が幕政への批判・諷諫を含み、それゆえに両面的であるという従来の評価を批判し、西鶴作品にみられるのは、むしろ当代の倫理の常識的枠組を逸脱することのない穏当な教訓的言説であるとし、それは同時代の仮名草子作家浅井了意味の言説と共通しているとする。

第1章では『武家義理物語』を論じている。第1節では、巻1の3「衆道の友よぶ衛の香炉」の登場人物が、〈香火因縁〉に基づいた必然的な衆道関係にあったことを論じ、第2節では、最終話である巻6の4「形の花とは前髪の時」における祝言の方法を検討し、衆道関係にあった登場人物松尾小膳と杉山市左衛門のふたりが実在の役者松本小膳と杉山勘三右衛門をモデルにしたのではないかという仮説を提示している。

第2章では『日本永代蔵』を中心に論じている。第1節では『日本永代蔵』冒頭文の注

釈的分析から、冒頭文は「ひそかに思ふに」で二分され、前半は当代の通俗教訓書と変わらない教訓的言説を踏襲し、後半は貨幣貯蓄の奨励と悪徳商法の戒めを述べたとした。第2節は巻6の4「身代かたまる淀川のうるし」の登場人物のあり方は、過書船奉行河村与三右衛門とその後継者である角倉・木村の運上銀支配をほめかし、彼らに対する教戒・擲論が込められていると論じている。第3節は、『日本永代蔵』『世間胸算用』からエビス神の描かれた章を考察し、西鶴の当代把握を浮き彫りにしようとしている。

第3章では『本朝二十不孝』を論じている。第1節では、『本朝二十不孝』全章を検討すると、その多くが『孟子』の「五不孝」や『論語』「里仁篇」の遠出の禁止に該当することが認められ、西鶴の執筆態度は孝道奨励策への反発などではなく、浮世の論理や倫理のただ中にあるものであるということ、西鶴の独自性は、不孝は社会的諸条件（たとえば巻1の1では「悪所銀」）によって生まれるものであるという認識になるとする。第2節では、巻1の4が、無用の出家という不孝の契機となった咄の点取り勝負が「物は尽し」の趣向に基づく咄作りの会であり、塩屋の倅の生涯は、申し子譚的な誕生・狂乱・四天王寺との因縁という共通点から、説経節の『しんとく丸』を下敷きにしているのではないかという仮説を提示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、西鶴が当代の政治や社会に対する批判的意図をもって作品を書いたという、近代的観点からの評価を否定し、西鶴は当代の常識的な倫理道德を逸脱しない穏当な教訓的言説をもって作品を創作し、そういう当代把握に基づく表現のありようを問うべきだという立場をとっている。その問題意識には、一定の評価を与えることができる。

本論文には、全体として、西鶴の道德観・倫理観を、西鶴が読み得たであろう通俗教訓書や仮名草子・浄瑠璃本等にあたって丁寧に検証し、注釈的・実証的な手続きを経て当代的な読みを還元しようとする基本的姿勢がある。たとえば第2章第1節では、『日本永代蔵』冒頭文を如上の方法で解説し、その上で西鶴の独自の認識を導き出そうとしている。また第3章第1節では、孝子伝の反転として読まれることの多かった『本朝二十不孝』を『孟子』の「五不孝」とそれを享けた当代の仮名草子などを用いて、ストレートに不孝譚として読むことを提唱している。そのような、注釈的・実証的方法の他にも、西鶴の古典知識や当代文芸・当代事件への関心を想定して、果敢に典拠・モデルを探索しようとする意欲がうかがえる。

しかし、序論で謳われた、西鶴の穏当な当代把握を明らかにするという観点が一貫していないのは、論文の統一性という点において問題があり、論文題目になっている「教訓性の考察」も、全体に及ぼされてはいない。また、第1章第2節のモデルの特定、第2章第1節で典拠として指摘される『日本蓬莱山』、第3章第2節の典拠としての「しんとく丸」

など、論の独自性のポイントになる典拠やモデルの指摘が確証不足で説得力にやや欠けることは否定できない。さらに、適切と思われない語彙の使用や文章表現が多く、誤字・脱字も目立つことは、本論文の信頼性を損なっている。

このように、多くの問題点を指摘できるとはいえ、本論文が、いくつかの新しい知見を提示し、西鶴研究に貢献していることは確かである。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。